『ザ・ライト・スタッフ』のあらすじ

takaidos

ザ・ライト・スタッフ

『正しい資質』
著者:トム・ウルフ(ジャーナリスト)
訳者:中野圭二、加藤弘和。
1979年発行。

この作者は表現がうまい。
映像が無くても、映像があったとしても伝わりにくい内容を上手く描いている。
文章を通して、飛行士たちの感じたこと、追体験が出来るような気になる事が出来る。

トム・ウルフは航空、宇宙飛行に全く知識がなかったので、6年間調べた。
そしてマーキュリー、ジェミニ、アポロ月面着陸まで書くつもりでいたが6ヶ月経過したところで妻にもう完成していると言われて筆を置いた。
しかしやっぱりジェミニもアポロ計画も書いてほしいところである。

それと、フォン・ブラウンが出て来ない。
V2ロケットを開発していたのに、初期のマーキュリーの打上げでは発射時に噴射が停止して、先端のアンテナだけポン！と飛んで行ったというが、どうしてそんなレベルに下がってしまったのか？
この本では技術的な面についてはほとんど触れられていない。
この本の段階では米国の宇宙開発の黎明期。
ソ連の核弾頭開発、スプートニク・ショック、キューバ危機という出来事を背景に、「飛ぶ飲む乗る」で「資質」を競い合う空軍テストパイロット野郎たちが、片や空軍の音速突破・宇宙飛行計画をし、片や民間ロケット開発のNASAに宇宙飛行士として参加して、国民的英雄に祭り上げられて行く過程での宇宙飛行士たちやその家族、関係者の心境、葛藤、給与、地位に焦点が当たっている。
宇宙はほとんど出て来ない。
全部地上の人間ドラマ。
その点でノンフィクションであり、文学的でもある。

「ニュー・ジャーナリズム」というのが彼の本義で事実を徹底して調べ上げて、フィクション、誤魔化しなく書く。

ジョン・グレンは77歳でスペースシャトル「ディスカバリー」にも乗った。
向井千秋もいっしょだった。

<目次>

まえがき
1.死の使い
2.正しい資質
3.イエーガー
4.実験ネズミ
5.一騎打ち
6.バルコニーに立つ
7.ケープカナヴェル
8.玉座
9.投票
10.正しい祈り
11.開けられないカプセル
12.涙
13.オペレーショナル・スタッフ
14.クラブ
15.高地砂漠
エピローグ

<時代背景>ソ連は常に先を進んでいた。
1957年10月ソ連、スプートニク1号で衛星打上げ成功。
1957年12月米国、ヴァンガード・ロケットでサクランボ状の衛星打上げ爆発して失敗。
1958年3月米国、アイゼンハワー大統領、宇宙計画披露。
1960年11月米国、ジョンFケネディ、第35代大統領に当選。
1961年4月ソ連、ヴォストーク1号でガガーリン宇宙へ。
1961年4月米国、キューバ侵攻作戦失敗(ピッグス湾事件)。
1961年5月米国、マーキュリー3号でアラン・シェパード、宇宙へ。
1961年8月ソ連、ヴォストーク2号でゲルマン・チトフ、宇宙へ。地球周回軌道17周。
1961年8月ソ連、ベルリンの壁建設、西側追い出しを迫る(ベルリン危機)。
1962年2月米国、マーキュリー6号でジョン・グレン、宇宙へ。地球周回軌道3周。
1962年8月ソ連、ニコライエフとポポヴィッチ、ヴォストーク3号、4号で「アベック飛行」。
1962年10月ソ連、キューバに核弾頭を送ろうとする(キューバ危機)。
1963年11月米国、ケネディ暗殺。
1964年8月米国、ベトナム戦争。
(1953〜1964年ソ連の最高指導者はフルシチョフ)

<登場人物>
◎ピート・コンラッド:フロリダからメリーランド州に引っ越し飛行テスト・パイロットになる。
ジェーン・コンラッド:ピートの妻。
バッド・ジェニングス:事故死。
アル・ビーン:事故死。
★ウォルター・シラー:ウォリー。元軍人の父親を持つ。朝鮮戦争出撃。アル支持。■
◎ジム・ラヴェル:グループ20の生き残りでナンバーワン。アポロ13号。
ミッチ・ジョンソン:母艦船尾に激突するも助かる。悪い神といい神が付いている。
★ジョン・グレンJr:唯一の海兵隊員。第二次と朝鮮戦争で勲功を挙げ、超音速ジェット機で初の大陸横断飛行を成し遂げた。プロテスタント長老派。スピーチが上手く笑顔がよく大衆を魅了する。しかし生活は非常にストイック。宗教改革家カルヴァンのよう。宇宙一番乗り目指していたが。。。◯
テッド・ホイーラン:事故死。パラシュートが作動せず。
☆チャック・イエーガー:20〜22歳の時に第二次世界大戦に参加。ドイツ軍機13.5機撃墜。
パンチョ・バーンズ:ミューロックのバーも経営者の女性。飛行機乗り。
ジェフリー・ド・ハヴィランド:父の設計した飛行機で音速を越えようとして空中分解。
スリック・グリッドリン:ベル飛行機会社の専属テスト・パイロット。X1。
スコット・クロスフィールド:エドワーズのナンバー2飛行士。X15。
★スコット・カーペンター:飛行士としては経験浅い。若い時放蕩生活をしていたと話して非難浴びる。ハンサム。グレン支持。宇宙について広い視野を持つ。◯。
★アラン・シェパード:アル。将校の息子。軍人貴族階級。クリスチャン・サイエンス教会。酒、タバコやらない。飛行経験は一番ある。2つの顔「氷のごとき中佐」「ケープのにこやかなアル」。自由時間の過ごし方を巡ってグレンと対立。■。
★ガス・グリソム:エドワーズ出身。鉄道員の父親を持つ。クリスチャン・サイエンス教会。がさつ。グレン支持△。■。
★ゴードン・クーパー:ゴードー。エドワーズ出身。機関部。飛行士としては経験浅い。アル支持。
★ディーク・スレイトン:エドワーズ出身。農家出身。がさつ。グレン支持△。
Tキース・グレナン:NASA長官。

ベティ・アン・グリソム:ガス妻。
ルネ・カーペンター:スコットの妻。
トルーディ・クーパー:ゴードンの妻。
マージ・スレイトン:ディーク妻。一度離婚していた。
アニー・グレン:ジョン・グレンの妻。ひどい吃り？
ルイーズ・シェパード:アルの妻。
ジョー・シラー:ウォリー・シラーの妻。

ジョー・ウォーカー:ロケット機X15の筆頭パイロット(NASA)。イエーガーは彼が一番群を抜いていると評す。
ボブ・ホワイト:X15の筆頭パイロット(空軍)。
ボブ・ギルラス:NASAの偉いさん。
ジェイムズEウェッブ:NASA長官。
クリス・クラフト:マーキュリー計画アトラスによる、最初のチンパンジー打上げの責任者。

コロリョフ:ソ連、宇宙計画設計主任。

ラウドン・ウェインライト:NASA専属雑誌『ライフ』誌の記者。
ジョンFケネディ:マーキュリー計画推進、人類をアポロで月への送ると宣言。
リンドン・ジョンソン:ケネディー政権副大統領。宇宙計画の特別顧問。意味のない職務。
レディ・バード・ジョンソン:ジョンソン夫人。

ゲルマン・チトフ:ソ連、ヴォストーク2号で地球を17周して打上げ地点に着陸した。

ショーティ・パワーズ:NASA報道官。
フランク・シャープ:ヒューストンの有力者。宇宙飛行士たちにシャープスタウンのモデルハウスを進呈する。
レオ・ディオーシー:宇宙飛行士たちのビジネス顧問。
ウォルター・クロンカイト:CBSテレビ解説者。宇宙飛行士が大好き。

グレニス・イエーガー:チャック・イエーガーの妻。

<場所>
メリーランド州パックス・リヴァ
ミューロック、のちエドワーズ空軍基地
ラングレー
ケープ・カナベル〜ココア・ビーチ(目に見えない虫など)
フロリダ州ヒューストン(1年のうち8ヶ月は炎暑。川や沼に油、有毒物。2ヶ月は風)

<あらすじ>
フロリダに暮らしていたピート・コンラッドと妻のジェーンは、メリーランド州に引っ越す。ピートはパックス・リヴァの空軍基地で飛行テストパイロットなる。
グループ20の同僚たちは当時高かった飛行機事故で半分が死んでしまう。

飛行機による事故で死んだ遺体は骨折と焼け跡で焼き鳥みたいになり、識別不能となる。
軍はパイロットの事故死を配偶者や家族に電話一本で伝えることはない。
必ず軍に誰かが家を訪問して知らせる。
先に事故の知らせが回ると、パイロットの妻たちは集まって誰が事故死したか気を揉む。

航空母艦への着艦は決まった場所にスムーズに降りるのではない。
波で上下左右に1.5〜3mほどうねっているフライパンの上に落下するのだ。
パイロットたちは同僚が事故死するたびに、死者のどの操作が悪かったなどと言い合い、自分にはそれを乗り切るだけの「資質」があると考えた。

ミューロックには、パンチョ・バーンズという女性の経営するバーがあった。
そこで陸軍航空部隊が音速の壁を破る研究をしていた。
パイロットたちは、毎晩のようにそこで飲み、車で競争したりした。
パイロットの事故死率は23%。
パラシュート脱出率は50%。
しかしパラシュート脱出するときはニトログリセリンを使うが、脱出時に怪我をしたり当たりどころが悪くて死んでしまうこともあった。
初期の頃20人仲間がいたグループ20もいつの間にか半分になっていて、その中で一番優秀なのはジム・ラベルだった。

ミューロック飛行場はその後エドワーズ空軍基地となり、陸軍航空部隊はアメリカ空軍となる。

チャック・イエーガー。
空軍テスト・パイロット。
1947年にX-1で初めて音速の壁を破った伝説の男。
Xシリーズのジェット機のパイロットは一番優秀。
しかしそれは1948年まで軍によって秘密にされた。
イエーガーは僚機をサポートすることになった。
人によっては高高度で失神する前に喧嘩っ早い酔っ払いのようになってしまう人間がいた。
ビル・ブリッジマンがそうなった時、イエーガーは自分の機体を降下させ、ブリッジマンにサポートするよう指示し、ブリッジマンはそれに誘導されてやっと正気を取り戻して事無きを得たことあった。
また僚機の窓が高高度で凍り視界が見えなくなってしまったことがあった。
イエーガーは通信で細かく指示を出し無事着陸させた。
イエーガーはそういう時は地上60フィートで飛行機を旋回しロジャーズ湖の方へ飛び去って行くのだった。
イエーガーはパイロットの中ではピラミッドの頂点だった。

出世する従い、小隊、中隊とより多くの部下を率いて行く。
パイロットたちは自然とイエーガーのいるエドワーズ空軍基地を最高の場所と考え、話し方もイエーガーの間延びした訛りのある話し方を真似た。
イエーガーはテスト・パイロットを辞めて、軍務に服した。
沖縄では北朝鮮兵士が亡命のために乗って来たミグ15を評価して米機より性能は低いと評価した。
しかし冷戦時代に２つのショックがアメリカに走った。
第一は1953年のソ連の原子力爆弾開発。
第二は1957年のスプートニク1号による衛星打ち上げ。
リンドン・ジョンソン、ソ連は世界の高地を制した。
下院議員マコーマック「アメリカも競争に勝たなければ滅亡する」と表現し、ICBMに核弾頭を想定して一種のパニックになった。
1958年3月ロサンジェルス会議を受けて、戦時体制のようになり人類をとにかく宇宙空間に送る計画が決定。
パイロットたちはなぜそういうことになるのか分からなかった。
軍の優秀なパイロットたちは、飛行機の操縦の腕前、資質を競っていて、宇宙飛行士はカプセルの中に入って飛ぶだけと考えた。
そのため宇宙飛行士を経験しても自分たちのキャリアがどうなるのか心配し、また宇宙飛行士を低く見下した。

アイゼンハワー大統領は宇宙飛行士の公募にあたって、一般の人を入れると大量に応募が殺到し、身元調査大変なので、軍のパイロットに絞った。

その上で奇妙な身体検査や心理検査が行われる。
場所はラヴレス・クリニックとライト・パターソン。
彼ら医師は宇宙飛行士選考の心身の検査について白紙委任状を得ていた。
親指に電極を指して通電したり、バリウムを大量に浣腸してトイレまで我慢させたり、氷水に足を漬けたり、暑い部屋に入って耐えたり、振動に耐えたり。
コンラッドはさまざまな反発を試みる。
その結果、マーキュリー計画の7人の宇宙飛行士が選抜されるが、コンラッドとジム・ラベルの名前はそこには無かった。

ガス・グリソム。
母親が『クリスチャン・サイエンス』教会の信者だった。
聖書を科学的に研究するとう事に特化した宗派で、歌はいいが楽器演奏は一切禁止だった。

1959年4月。
ワシントンでNASAがマーキュリー7を発表。
自分の資質でここまで来れたと内心思う宇宙飛行士たちだったが、ジョン・グレンが会見の空気を一変させてしまう。
ジョン・グレンは「自分たちの仕事が続けられるのも、妻や子供たちのバックアップがあってのことです」と臆面もなくいい放ち、宇宙飛行に合衆国がひとつとなって動くのにふさわしい、道徳的調子を加えた。
メディアはこぞって宇宙飛行計画を持ち上げた。
合衆国をひとつの群体生物のようにまとめてしまり、宇宙飛行士は飛ばずして英雄に持ち上げられることになった。

ほかの6人は田舎育ちで互いに強い競争意識を持ち「飛んだら飲む、飲んだら乗る」、新型のスポーツカーを乗り回し酒場に仲間以外の人間が来ると汚い言葉を投げかけたりする戦闘機野郎たちだった。
しかしジョン・グレンはストイックで真面目な軍人で聖者肌。
ポンコツの車を乗り回し、小さな部屋で質素に暮らしトレーニングは人一倍した。
グレンは突然公衆の面前に現れた、空飛ぶ修道僧だった。
ほかの宇宙飛行士たちはグレンの言動には警戒した。

メディアはソ連のスプートニク1号打上げに対して「一騎討ち」という言い方で打上げ競争を持ち上げた。
古代イスラエルのダビデとゴリアテの一騎討ちを意識していた。
下院議員は7人の宇宙飛行士たちを議会に招んだ。
ただ単に宇宙飛行士たちに会って話したかっただけのために。
弁護士リオ・ディオーシーは顔を紅潮させてNASAと契約した。
顧問料も諸経費も要らないという心酔ぶりだった。

世間は宇宙飛行士7人が最も優秀な飛行士と考える風潮になる。
チャック・イエーガーは記者インタビューされるが、宇宙飛行士の選任はパイロットとしての実績で選ばれていないこと、宇宙船は全自動でパイロットの資質は関係ないことを伝える。
最初のマーキュリーは猿が乗ることにもなっていると話して、記者たちを驚かす。

1959年9月『ライフ』。
宇宙飛行士7人の妻たちの写真を大修整して巻頭に飾る。

宇宙飛行士たちは単身、フロリダ、ケープカナヴェル基地のココア・ビーチで遊んだ。
やがてグレンが宇宙飛行士たちに醜聞が持ち上がらないように、女遊びを止めろと言い出す。

アルは私生活には干渉するな、と真っ向から反対。
いつしか、グレン、スコットの2人と、アル、ウォリー、ガス、ディーク、ゴードンの5人の間に溝が出来ていた。

宇宙飛行士たちは宇宙船シミュレーターで受動的に訓練を受けるがそのうちにいろいろな要求を上げ始めた。
宇宙船に窓付けること、脱出用ハッチに工夫をすること、手動操縦にも切り替えられるようにすること。

1960年半ばまでには有人宇宙飛行を成功させる予定だったが、マーキュリー計画は遅れていた。
猿の調教は順調だった。

エドワーズ空軍基地は拡張して、パンチョの店『Happy Bottom Riding Club』も接収されてなくなっていた。
裁判騒動もあった。
空軍は彼女が売春宿を営んでいたといい、彼女は確かな情報筋によると空軍がナパーム弾で店を焼き払おうとしていた、と。
しかし彼女は農場主の四人目の夫と別に場所で暮らしていた。
この時代は霊感ブームでもあり、霊感を受けた不動産は値打ちが高かった。

宇宙飛行士たちは飛ぶ前から英雄になった。
マーキュリー計画で、爆発するかもしれないレッドストーン・ロケットに乗って宇宙飛行を目指す英雄だった。
しかし空軍のロケット機Xシリーズではすでに爆発・炎上は起きていた。
X-15では高度もスピードも宇宙に近づいていた。
しかし高高度では酸素不足の問題と、超音速では空気力学が働かなくなって飛行操縦が難しくなり、事故が多かった。

マーキュリー計画のレッドストーン・ロケットは弾道飛行用。
同計画のアトラス・ロケットは有人宇宙飛行用。

1960年半ば7/29にレッドストーン打上げ失敗。
続いてマーキュリー計画の準備が整った段階でアトラス打上げを披露したが、噴射が途中で止まり、ロケット自体は飛ばず、先端の脱出用部分だけが「ポン！」という音ともに1200メートル飛んだだけで終わってしまった。パーティの景品に似ていた。
次期大統領選に向けてケネディは共和党のロケット開発の遅れを徹底的に叩く。
空軍の有人ロケット機X-15は速度マッハ3、高度30kmを超えて成果を出していた。

次はX-20ダイナ・ソア計画が有力控えていた。
『ライフ』はボブ・ホワイトを巻頭に載せる。

グレンはケネディ大統領の就任演説をラジオで聴きながらも心ここにあらずだった。
ロケット打上げの失敗を見て誰が最初に宇宙に行けるかというより誰も宇宙に行けないのではということからして心配のなり始めていた。

NASAボブ・ギルラスは当初実際の飛行は前日に選任しようと思っていたが、宇宙船の操縦の訓練が必要なので数週間前に選ぶことにする。
選出方法は互選になった。
そして一番乗りはアルになり、マスコミの取材攻勢を防ぐためにグレンとガスがバックアップとして一緒に訓練を受けることになった。
グレンは愕然とするが笑みを浮かべてアルを讃えた。
後でNASA上層部ウェッブに宇宙一番乗りであるべき人間は重要であると訴えたが、新任のNASA長官は取り合わなかった。
ソ連が宇宙飛行士模型と犬の打上げに成功。
ケネディ政権科学顧問のウィスナーは人類打上げ前にもう一度猿を使ってテストする旨訴えたがギルラスは受けなかった。
最初の打上げはレッドストーン・ロケットだった。
ガスとグレンはいつもアルといっしょにいて道化役者を演じた。
1961年4月12日、ソ連ユーリ・ガガーリン27歳がヴォストーク1号で人類初の宇宙軌道飛行。
ソ連は主任設計士情報を明かさなかった。
ケネディはウェッブとNASAの最高の地位の科学者ヒュー・ドライデンを招いて、ソ連主任設計士の正体を見せる。
ケネディはキューバに傀儡部隊を送るが失敗する。
二回のロケット打上げも失敗。

①1961年5月5日。ついにアルが有人宇宙弾道飛行。
4時間の打上げ待ちで狭いロケット乗っていたアルは小便我慢しきれず、医師団に相談。
与圧服の中してしまえと言われて放尿する。
打上げは無事成功。15分の飛行は終わった。
アルの奥さんルイーズの様子を探ろうと打上げ前からマスコミが家を取り巻いていたが、彼女はいつもの空軍テストパイロットより心配はしていなかった。
空軍の最新鋭機は、どんどん気違いじみた飛行機の名前になって行ってテスト内容も危険そうだったので。
ワシントンに招ばれ凱旋パレード。

②1961年7月21日。
ガス・グリソム、修正されたレッドストーンで弾道飛行。
ガスは心拍数がかなり上がった。
着水後、ヘリが救助の綱を降ろす前にハッチを爆破してしまい、宇宙船は水没。
ガスも溺れかけて、さらに救助されたヘリの上で救助用のジャケットを羽織ろうとパニック状態になった。
飛行場で表彰を受けるだけにとどまった。

1961年8月6日。
ソ連ゲルマン・チトフ、ヴォストーク2号で地球周回軌道17周。上空125マイル、宇宙に24時間滞在。
海への着水でなく打上げ地点への着陸！

1961年10月11日。ボブ・ホワイト、X15で記録更新。
1961年11月。米、猿をアトラスに乗せて地球周回軌道2周。

③1962年1月27日。
ジョン・グレン、アトラスに5時間搭乗するが悪天候のため延期。
宇宙計画特別顧問として出番の無かった副大統領リンドン・ジョンソンが妻アニーを訪問して慰めの言葉をかけようとするが、アニーは吃りでテレビ取材に自信が無く断る。
ジョンソン怒り狂い、NASAに調整させようとし、ジョン・グレンに電話させるが、ジョンはアニーを支持。
ジョンソンの怒りを聞いてNASA長官ウェッブ、ロケット搭乗者順位を変えようと言い出すが周囲の反対に遭い沈黙。
ワシントンのオフィスで「こんな立派なオフィス貰ってるのに簡単な命令ひとつ聞いてもらえない！」とわめく。
のち、ケネディがジョン・グレンをホワイトハウスに私的に招待。ウェッブもジョンソンも招かず。

2月20日、ジョン・グレン再度アトラスに搭乗。
マーキュリー6号(フレンドシップ7号)、無事地球周回軌道へ。
グレンの心拍は全く平常そのものだった。
グレンは周回中、宇宙船の周りにホタルのように明滅するものをずっと見る。
管制室はそのことには注意を払わず、着水嚢が開いていないかを繰り返し訊いてくる。
管制室はグレンに理由を言わなかったが、どうやら大気圏突入の時に必要な熱遮蔽板、着水嚢問題があるようだった。
大気圏突入後も結合索を切らないように指示を受ける。

ヘリの代わりに駆逐艦が救助。

ケネディ、リンドン・ジョンソン、迎えに来て、ニューヨークで他の宇宙飛行士とともに凱旋パレード。
-8度という気温にも関わらず、みんな沿道に出て、涙を流しながら紙吹雪や花を投げ、いかついニューヨークの警察官も歓呼の声を上げる。
そして7人の宇宙飛行士家族はNASAやSP、ライフ誌の記者たちとみんなで話題の劇を観に行き、客もみんなに席を譲り、劇も途中セリフが宇宙飛行のことが盛り込まれていた。
ジョンFケネディの脳卒中で入院中の父親もジョン・グレンらが訪問した時、ずっと涙を流していた。
それほど、ソ連との一騎討ちにみんなが感動していた。

1962年7月4日。
ヒューストン、暑くて石油の出る、広い土地。
NASA、宇宙飛行士たち、月への打上げのためにケープからヒューストンに引越し。
宇宙飛行士たちは地上37度、地下は死ぬほど冷房の効いた土地、沿道を埋める無表情の民衆、やたらとノリのいい現地の有力者に迎えられる。
ヒューストン・コロシアムではカクテル、バーベキュー・パーティーと熟年ストリッパーのおもてなし。

スコット・カーペンターの家。
魔法を信じ縁起を担ぐ観光客は庭の芝生をちょっと失敬したり、お子さんといっしょに写真を所望したりした。

ヒューストンの有力者フランク・シャープが宇宙飛行士たちにモデルハウスを提供したいと言い出す。宇宙飛行士をエサに泥濘やすい何もない土地に人々を誘致したいという理由。
宇宙飛行士たちは貰って売ってしまおうと考える。
また『ライフ』誌の専属契約に他社が不満を抱きが始める。
ケネディ、ジョンソン、ウェッブが仲裁に入り、家は原価に近い金額、低金利ローンで購入、専属契約による年金みたいなものも確約された。

④次の飛行はディーク・スレイトンの予定だったが心臓に問題があると診断され、スコット・カーペンターに変更になる。
医師たちはディークはオペレショーナルな状態にないという判断を下した。
(オペレショーナルは、本物、操縦、行動、The Right Stuffを指す。)
ディークは激怒したが、誌面ではガッカリしたという表現になる。
スコット、オーロラ7号で発射。

スコットは無重量空間で新しいマニピュレーターを使っていくつかの実験を行なう。
さらにジョン・グレンが見たホタルのようなものが宇宙船から出ているらしいことを突き止める。
しかし燃料を使い過ぎ大気圏突入時に宇宙船ごと燃え尽きた心配がされた。
しかし無事着水。
クラフトはスコットに二度と飛行させないと激怒。

スコットの妻ルネは飛行前、取材陣からかくれんぼ。
ライフ誌に別の家を手配してもらったり、4人に子供たちを車の下に這わせて移動したりした。

アルは飛べなかったディークに「宇宙飛行活動コーディネーター」の役職を付けるよう提案し、ディークはNASA内部にヒエラルキーを作ることが出来るようになる。
スコットが危険な目に会ったのは、余計な宇宙実験のせいと、クラフト、ウォルト・ウィリアムズ、宇宙飛行士たちは考える。

1962年8月。
ニコライエフとポポヴィッチ、ヴォストーク3号、4号で「アベック飛行」。
縦に並んで地球周回。
編隊を組んでの飛行が連想され米国はまたヒステリー状態に陥る。

⑤ウォリー・シラー。
宇宙船をシグマ7号と名付けて、燃料を食う余計な実験はせず、地球6周。
自動制御に任せて余計な姿勢制御をしなければ、もっと地球周回出来る、着水地点もっと正確に出来ることを証明。
ウォリー、ホワイトハウスに招かれる。
ケネディとの会見は簡単に終わった。
1962年10月16日。
U2型機がソ連の核ミサイルをキューバに運んでいることを報告していたのだった。

ジョン・グレンは軍の階級でいえば五つ星、元帥級の名誉と特権を持ち「銀河系一騎討ち将軍」昇進する。
しかしたびたびの議員訪問を拒否しウェッブと対立する。
ウェッブは予算獲得のためにも尽力してほしいと言うがダメだった。

次の宇宙飛行士9人が決まった。
ジム・ラヴェル、ピート・コンラッド、ジョン・ヤング、ニール・アームストロング…。
彼らは自分たちこそ空軍の優秀なパイロットである、という自負があった。

そしてその9人の妻たちは、7人の宇宙飛行士たちよりいい生活を営なもうとし始めていた。
軍では夫の階級が上がるとその妻の階級も上がるという暗黙のルールがあり、通常上官よりもいい生活を控えるという心がけがあった。

「宇宙飛行士活動コーディネーター」ディークの妻マージが中心になってAWC(Astronaut Wives Club)というお茶会を立ち上げる。
しかし次の9人の妻たちは最初の7人に敬意を払わず、ガスの妻も来なくなって廃れていった。

⑥1963年5月？
ゴードン・クーパー。
地球周回軌道を34時間飛行予定。
打上げ準備中の3,4時間を利用して寝る。
ゴードンは落ち着いていた。
実験と尿の採取を行ないながら地球周回。
21周目に電気系統の故障で手動で大気圏突入。
無事狙った目的地に着水。
大歓呼で迎えられた。

妻トルーディ。
向かいの家にアンテナを立てられたりサーカスのような騒ぎになってしまった。

チャック・イエーガー。39歳。
空軍による宇宙航空の推進。
1947年、X1機で音速越え。
1961年、飛行テスト責任者としてエドワーズに戻る。
1962年、航空宇宙研究パイロット(ARPS)の校長となる。NASAとは別に宇宙を目指すのが目的。
X20など大気圏突入の際の翼のない胴体のものと「有人軌道周遊実験室」(MOL、スカイラブ)を使う。
宇宙飛行士の地位が上がって空軍もNASAに飛行士を送り込めるように「チャーム・スクール」も開いた。
宇宙飛行士になれば、安い給料以外に余得が付いたので飛行士たちも一生懸命だった。
1963年、空軍も宇宙に接近していた。
6月、ジョー・ウォーカー、X15でマッハ5.92達成。
7月、ボブ・ホワイト、高度59.6マイル達成。
X20完成。より強力なロケット・エンジンを搭載していた。
F104全長50フィート、翼長は各わずか7フィート。
ケネディからイエーガーにNASAに黒人パイロットをひとり送り込べきという決定がもたらさら

れる。
エド・ドワイト空軍少尉。
なんとか宇宙飛行コースに入れたがNASAが採用するのは望み薄だった。
パイロットの資質だけの問題が人種の問題まで入って来るというのはひとつの事件だった。
職業軍人将校全般で、白人社会でもイスラエルでも、その土地生まれか、古い移民の出であることは世界的に共通の現象。
NF104納入。
イエーガーはこの機体の限界テストをする。
コントロールを失ない墜落。脱出したが左半身に大火傷をおう。
国防長官ロバート・マクナマラはX20計画の打ち切り。
スカイラブは公式には命運を保った。
しかしその後も彼は東南アジアの空をB57に乗って100回以上も飛んだ。

1963年。
マーキュリー計画打切り。
ケネディ政権はジェミニ、アポロ計画400億ドルの予算承認を得るために腐心していた。
7月、アルがメニエール氏症なって一時使い物ならなくなったが、アポロ14号船長として月面着陸し、ゴルフ・パフォーマンスを見せた。
ディーク、19年いた空軍を除隊。
7月19日、ジョー・ウォーカー、X15で高度66マイル達成。
8月22日、さらに67マイル達成。
9月28日、7人の宇宙飛行士たち、アイヴァンCキンチャロー賞受賞。飛行テストに卓越した者に贈られる。
11月22日、ケネディがキューバとソ連に関わりの深い人物に暗殺される。

しかしリンドン・ジョンソン大統領は宇宙飛行計画をさらに強力に推進した。

(その後、ジョン・グレンはNASAを辞めて実業家に転身。
1998年にはスペースシャトル「ディスカバリー」に乗って向井千秋らと再び宇宙に出た。
77歳だった。)

1965〜1966年にかけて実施された二人乗り有人宇宙飛行計画。
長期宇宙滞在のための生命維持装置テスト、人工衛星・宇宙船ドッキング、着陸地点への着地、船外活動、燃料電池の使用、宇宙飛行士の心身面への影響調査。

1966〜1972年月面着陸着陸を目的としたアポロ計画。
1972〜1975年スカイラブ。

<あとがき>
中野圭二。
翻訳は苦労した！

<メモ>
グループ20:エドワーズ空軍基地のテスト・パイロット仲間。家族ぐるみの付き合いだが次々と事故死して半分なってしまう。

ジョン・グレン「私たちの誰にしろこういう任務を続けていくことは実際に不可能だと思いますね、もし家庭での強力な支持がないと。…それがやりたいことなら家内はバックアップしてくれますし、子供たちもです。」(宇宙飛行士になったことについてたずねられて)

SETP:実験テスト・パイロット組合。空軍の最も主要なパイロットの組合。実験機の限界テストもするため最高の技量を必要とされる。7人の宇宙飛行士を飛行士としては疑問視する。

ヴィクトリア朝の紳士:真実を歪め、表面だけを取り繕う偽善者。